



じぶんてき うちゅうろん

# 自分の宇宙論

---

火波

---

## 『それ』を知った日

---

す、と息をする。

空気中の窒素と酸素、その他諸々を吸い込んで。

ふ、と息をする。

肺や身体の中の窒素と二酸化炭素、その他諸々を吐き出して。

まだ何も知らなかった頃の僕が、今、頭の中に居座っている。

記憶という名の引き出しは、その少年のせいで開け放たれている。

そこからただこぼれるように流れ落ちてくる思い出。

ああ。あの時から、僕は少し変だった。

今だから解る、あの時の自分の無知。

あまりに浮世離れした思考回路をもっていた。

まだ、僕が僕としての自覚さえもってなかった時代。

この星どころか、この国の仕組みだって微塵も理解しなかった時代。

世界は、自分の見える地平線から先に存在なんてしていないと思っていた。

海も見えない町に生きていたせいかもしれないが。

山は、頂上から先は切り立っていて、そこが世界の終わり。

地平線は一度引かれたその線より向こうはない。

この小さな町が、世界の全てだと思った。

その年の夏。キャンプと称して車に乗って、その山の向こう側まで行った。

世界は、その山の頂上より先に広がっていることを知った日。

次の夏に海へ行き、水平線を見たときに悟った。

これこそが、世界の終わりなのだ。

一直線に引かれた空と海の境目は、どこかで交わっていて、そこが世界の終わりだと。

そうに信じて疑わなかった。

この小さな島が、世界の全てだと思った。

その年の秋。海の向こうから来た人が隣へ移り住んできた。

世界は、海の向こうにもまだ広がっていることを知った日。

その年の冬。地図を見て、この星は四角なのだと感じた。

だから、途中で切れている大陸も海も、そこで空に交わっているのだと信じた。

この四角い薄っぺらい世界が、自分たちの生きていける空間だと感じた。

驚きはした。でも、絶望はなかった。

だって、その途切れた先へ足を踏み出せば、僕はこの世界から逃げることができる。

もしかしたら誰も知らない世界へと行けるのかもしれない。と。

そんな風に思った。

次の年の春が来る前。親に聞かされて、この星は丸いのだと知った。

海は陸へ。陸は海へとしか、繋がっていないと知った日。

その時から、僕は球体の内側が世界だと思った。

この星は回っているのだそうだから、遠心力が働くならば、円の内側に居ないと飛ばされてしまうから。

球体の内側に、山も海も川も空も星も月も太陽も。全てがあるのだと思っていた。

球体の外側には、ずっと大地が続くだけだと。そう思っていた。

あまり驚けなかった。でも、酷く絶望した。

この球体の内側からは、僕らは出ることができないと知って。

どんなにあがいても、これ以上の『外』が存在しないのだと思って。

その年の春。部屋に飾られた真新しい地球儀を見た。

人が、この『地球』という名の球体の、外側に立っていることを知った日。

## ぼくの知ること

---

この星には、『重力』と『引力』があつて。

そんな存在のおかげで、僕らはこの星の上に足を付けていられるんだそうだ。

そんな存在のせいで、僕らはこの星より外へは出られないのだそうだ。

この星が四角だと思っていたときなんかよりも、ずっとずっと絶望した。

でも、この世界が球体の内側だと思った時よりも、ずっとずっと希望があつた。

その年の盆。この星の外の空のことを、『宇宙』と呼ぶことを知つた。

そこには重力も引力もない代わりに、空気もないのだということを知つた。

でも、僕はこの星の外へ出たかつた。

外へ。外へ。ただひたすら、未知の世界を望んだ。

その年の晩秋。人は宇宙へ行けることを知つた。

僕もがんばれば、この星から脱出できるかもしれないと。

初めて実感を持ってそう思えた。

どの授業のどんな話よりも、宇宙の話が楽しかつた。

どのクラスのどんな子よりも、星の方が好きだつた。

どの本のどんな言葉よりも、星の名前が心に残つた。

僕はまだ、その先を望む。

宇宙には、僕らのすむ以外の星が、それはもう数えられないほどある。

肉眼で光って見える星は、僕らのいう『太陽』と同じものである。

つまり、自ら光を発している星しか、僕らには見えないということ。

けれど、光っている星なんかよりも、光らずにたださまよっている星の方がきつと多い。

そしてその中には、僕らと同じような『文明』を持つ命があるかもしれない。

そしてその太陽たちは、集合して『銀河』を作る。

僕らのすむ星も、『天の川銀河』と呼ばれる銀河の中にある。

銀河の中心は、もっともっと太陽のような星が集まっていて、眩しいらしい。

銀河は、渦巻きのように、また円盤のように広がっている。

そしてその銀河も、宇宙にはそこかしこに転がっているらしい。

星にも命があって、生まれればその後は確実に『死』に向かって歩くらしい。

でも、僕たちとは時間の感覚がまるで違う。

何十万年、何十億年、何十兆年と生きて死んでいく星のスケールは、最早もうよく解らない。

星の死は可憐で美しく、また大規模らしい。

太陽たちはその中心で『原子』だか『電子』だかを作ったり分解したり結合したりしているらしい。

その時のエネルギーが、熱や光になって存在するらしい。

中ではその作用がうまくバランスをとっていて、それなりに安定したエネルギーを出せるらしい。

でも、あるとき突然、そのバランスが崩れたなら。

そこから先は、急加速で死へと向かう。

それは太陽が大きければ大きいほど早い。

一気に収縮して、周りの物体を取り込んだりもするらしい。

その中心核では、『鉄』が生まれるんだとか。

僕らの太陽の、何十倍も大きな太陽が爆発したとき。

一瞬にしてすべてを吐き出し、その一瞬で、たまに『金』や『銀』、『ウラン』だかが作られる。

そして太陽は、たまにその死骸を残すらしい。

その死骸は、『ブラックホール』と呼ばれるものになったりもするらしい。

ブラックホールは、光さえも逃げられない早さで全てを吸収していく。

そして肉眼でそのブラックホールの姿を確認することができないので、見つけづららしい。

ブラックホールは、時も空間もゆがめてしまう摩訶不思議物体で、まだその実態は全て知られていない。

なにせ、この世の何よりも早い光をも飲み込んでしまうのだから。

こんな感じで、僕は知識を溜め込んでいった。

たまに『らしい』とか、『だとか』とか、曖昧なこともあるけど。

でも僕は楽しかった。

こんな風に自分が知識を溜め込めるなんて、夢にも思っていなかったから。

僕はいろいろな宇宙の話を受取り続けた。

どんどん覚えて、知って、学んで……。

でも、僕はまだ解らない。

まだ、知らないんだ。

宇宙が、どれだけ広いのか。

宇宙の先は、どうなっているのか。

僕の宇宙論は、まだまだ曖昧で、未完成なままだ。

いつか、全てを知る事ができたらいい。